

# ラオスにおける日本語教育事情 ー活動型初中級クラスにおける日本人学生との 作文交換活動の実践報告を中心にー

田渕 七海子

## 要 旨

本稿では、まず、ラオスにおける日本語教育の歴史と現状を概観する。ラオスの日本語教育は、2001 年にラオス国立大学ラオス日本人材開発センター(以下、LJC)で組織的な日本語教育が開始してから、わずか 7 年であり、「創成期」から「発展期」に移行する段階にあると言える(平田 2008)。現在のラオスの日本語教育の課題として、1)ラオス人教員の不足、2)ラオスの学習者や文脈にあった教材の不足、3)初級から中級への橋渡しならびに中級カリキュラムの整備などが挙げられる。次に、特に課題 3)に関して、報告者が LJC で取り組んできた活動型初中級クラスについて紹介し、日本人学生との郵送による作文交換活動の実践を報告する。

【キーワード】活動型初中級クラス、 自律学習、 作文交換活動

## 1. はじめに

報告者は、2006 年 9 月より 2008 年 8 月までの 2 年間、独立行政法人・国際交流基金(ジャパンファンデーション)のボランティア制度<sup>1)</sup>のひとつである海外日本語教育指導助手(以下、指導助手<sup>2)</sup>)の第 2 期生として、ラオスの首都ビエンチャンで活動を行った。受け入れ機関は、ラオス国立大学ラオス日本人材開発センター(Lao-Japan Human Resource Cooperation Center、以下 LJC<sup>3)</sup>)である。ここで、国際交流基金派遣日本語教育専門家とラオス人主任の指導のもと、主として、LJC 標準コースの初級ならびに、初中級クラスの授業担当や日本語コース運営の補助業務にあたった。

本稿では、まず、ラオスの概況を述べ、ラオスにおける日本語教育事情について、その歴史および現在の日本語教育機関や日本語教師、学習者の状況などを報告する。そして、ラオスの日本語教育の課題を踏まえた上で、LJC での初級修了以降の学習者にむけた日本語指導について、日本人学生と行った郵送による作文交換活動の実践例を紹介する。

マー、中国の 5 カ国と国境を接した内陸国である。面積は約 24 万 km<sup>2</sup>で、日本の本州と同程度の広さ、人口は約 572 万人で、首都ビエンチャンには、約 70 万人が住んでいる。計 49 民族のうち、低地ラオ族が約 60%を占める。宗教はほぼ 90%が仏教徒で、信仰心は強い。公用語はラオス語である。

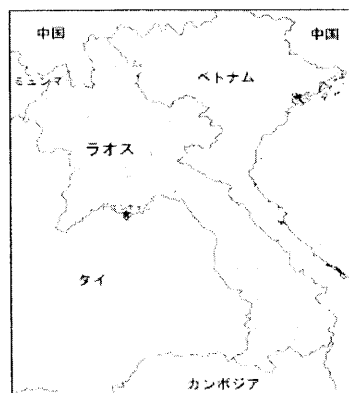


図 1 ラオスの位置

([http://www.freemap.jp/asia/asia\\_laos\\_all.html](http://www.freemap.jp/asia/asia_laos_all.html))

2008 年 10 月 5 日アクセス)

## 2. ラオスの概況

### 2.1 ラオスの基本情報<sup>4)</sup>

ラオス人民民主共和国は、インドシナ半島の中心に位置し、タイ、ベトナム、カンボジア、ミャン

マーは、1353 年にランサーン王国として統一された後、1899 年にフランスのインドシナ連邦に編入された。1953 年 10 月に仏・ラオ条約によって完全に独立した。その後、内戦が繰り返されたが、

1973 年 2 月「ラオスにおける平和の回復及び民族和解に関する協定」が成立。インドシナ情勢の急変に伴って、1975 年 12 月に人民民主共和国として成立した。人民民主共和制をとり、社会主義体制下にあるが、1986 年に市場経済導入と経済開放政策が採択された。1997 年には ASEAN に加盟した。主要産業は、農業、工業、林業、鉱業および水力発電であり、2007 年度の一人当たりの GDP は 678 ドル、成長率は 8%(2007 年推定値)である。

日本との関係は、1955 年に外交関係を樹立した。2005 年に 50 周年を迎え、良好であり、在留邦人は、453 名(2007 年 10 月現在)である。ラオスに進出している日系企業は、木材加工業、縫製業、機械組立工場を中心に増加傾向にはあるが、近隣国に比較するとまだ少ない。

## 2.2 ラオスの教育事情

1996 年の第 6 回ラオス人民革命党大会において、2020 年までに後開発途上国から脱却することが、長期国家目標として定義された。そのうち、教育開発は、国の最優先事項のひとつである。教育省は、2015 年までに、万人のための初等教育の完全普及達成を目指している(上野 2008)。

教育制度は、5・3・3 制で、小学校が 5 年間、前期中等教育(中学)が 3 年間、後期中等教育(高校)が 3 年間の計 11 年となっている。小学校の 5 年間は、義務教育である。2006 年度の小学校の数は 8740 校で、就学率も年々上昇している。純就学率は 86.4%になるが、最終学年までの残存率では 61.7%に留まっている。高校と併設で、初等技術学校(3 年間)もある。

高等教育は、中等技術学校(3 年間)、高等技術学校(3 年間)、大学(1 年間の基礎教育課程を含む 5 年間が一般的)である。University としての大学は、ラオス唯一の国立大学であるラオス国立大学 1 校のみで、現在 10 学部を設置する。College と言われる私立大学は、全国に 15 校程度存在する(上野 2008)。

外国語学習に関しては、中学および高校で、週 3 時間程度の外国語教育が行われており、一般には、英語やフランス語が教えられている。また、テレビの普及や物流の面で、隣国タイの影響を多分に受けている。その上、ラオス語とタイ語は、非常に類似していることから、特に、ビエンチャンに住むラオス人のほとんどは、タイ語を理解する。

## 3. 日本語教育事情

### 3.1 日本語教育史

ラオスにおける日本語教育史を振り返ってみると、1965 年から、JICA 青年海外協力隊隊員によりビエンチャンのいくつかの公的機関で、日本語教育が盛んに行われていた。しかし、1975 年 10 月の革命を機に、全ての日本語教育が休止となった。その後、1995 年にラオス国立大学の基礎教育課程(School of Foundation Studies、略称 SFS)で、日本の文部科学省奨学金による国費留学を目指す準備コースとして、日本語コースが開始される(2005 年より休止)までの約 20 年間、日本語教育の門戸は閉ざされた。この再開をきっかけにして、1996 年にビエンチャンに、民間日本語学校 LIS 語学学校(Language International School)が開校した(2007 年閉校)。続く 2001 年に、ラオス国立大学内に LJC が設置されると、同時に同センターの日本語コースも開講した。そして、2003 年 9 月、ラオス国立大学文学部に日本語学科が設立され、2008 年 8 月に第 1 期生 7 名が卒業した。現在、ラオスで唯一、日本語の学士号がとれる機関である。

また、2007 年 12 月には、日本語能力試験(Japanese Language Proficiency Test、以下 JLPT)が LJC を実施機関として、ラオスでも行われるようになった<sup>5</sup>。合計 158 名が出願し、139 名が受験した(1 級 6 名、2 級 12 名、3 級 78 名、4 級 43 名)。全体の 90%近くを 3、4 級の受験者が占めている要因としては、初年度だったために、すでに初級を修了している学習者の多くも 3 級を受験したことが考えられる(平田 2008)。

### 3.2 日本語教育の現状

#### 3.2.1 日本語教育機関・教師数・学習者数

2008 年 7 月現在、日本語教育機関は、学校教育ではラオス国立大学文学部日本語学科の 1 機関のみである。5 学年で計 75 名が在籍している<sup>6</sup>。学校教育外では、LJC を含め、民間日本語学校等、計 11 機関となっている。その内、10 機関がビエンチャン市内にある。初・中等教育機関では、まだ実施されていない。

学習者数は、1998 年度調査では 80 名(国際交流基金 2000)だったが、2003 年度調査では 493 名(国際交流基金 2005)と驚異的な増加を示した。学習動機としては、日本や日本文化に対する漠然とした憧れや留学を希望しているなどが考えられる。このよ

うに潜在的にあった日本語学習熱が、2001 年に LJC で一般成人向けの組織的な日本語クラスが開講したことにより、表面化したのであろう。現在の学習者数は、ビエンチャンを中心に、常時、約 500 名と推計される。そのほとんどは初級レベルであるが、近年、初級を修了する者も少しずつ増え始めている。

教師数は、ラオス人教員 9 名、日本人教員 19 名(国際交流基金派遣日本語教育専門家 2 名、ジュニア専門家 1 名、海外日本語教育指導助手 1 名<sup>7</sup>(報告者)を含む)の計 28 名である(平田 2008)。日本語教師のネットワークとして、2001 年よりラオス日本語教育研究会が発足し、会員は現在 36 名である。2 ヶ月に 1 回程度の研究会ならびに、メーリングリストによる情報交換が行われている。

### 3.2.2 日本語教育関連行事

2004 年より毎年 3 月に、ラオス日本語スピーチ大会が開催されている。これは、在ラオス日本国大使館、元日本留学生会、各日本語教育機関による実行委員会主催行事である。第 4 回となる 2007 年大会からは、日本在外企業協会の後援のもとに、優勝者は、東京で開催される ASEAN 日本語スピーチ・コンテスト優秀者大会に招聘されている。2008 年は、ビエンチャンのみならず、地方からも応募があり、計 40 名の参加者の内、第 1 次書類審査に通った 16 名が本選に進み、500 名を超える聴衆の前でスピーチを披露した。

LJC 日本語コースは、2006 年より年 1 回、LJC にほんごまつりを開催している。2008 年に実施した第 3 回 LJC にほんごまつりでは、LJC 受講生が日本語の歌や寸劇を披露したり、スピーチ発表や硬筆コンテストを行ったりした。また、LJC は、日本映画上映、盆踊り、歌唱コンテスト、日本料理コンテストやおりがみコンテストなども実施し、日本語学習者だけでなく一般のラオス人に向けても、広く日本や日本語、日本文化の紹介を行っている。

### 3.2.3 ラオスの今後の課題

このようなラオスにおける日本語教育の課題として、(1)ラオス人教員の不足、(2)ラオスの学習者や文脈にあった教材の不足、(3)初級から中級への橋渡しならびに中級以降のカリキュラムの整備が挙げられる。これらの課題については、平田(2008)においても述べられている。

(1)ラオス人教員の不足に関して、現在、教えている 9 名のラオス人教員も元々の専門は、日本語で

はない。教員養成としては、LJC で 2005 年より教師入門クラスを開設し、日本語教育専門家の指導のもと養成を行っている。また、2008 年より毎年、ラオス国立大学文学部日本語学科の卒業生が輩出されることになるので、その中から教員を目指す者が出てくることが期待されている。2008 年 8 月現在、卒業生のうち 2 名を LJC の教員候補の事務スタッフとして、採用している。さらには、国際交流基金の長期・短期訪日研修等や近隣のタイやベトナムで行われるセミナーや研修に参加するなど、現職者研修も行っている(平田 2007)。しかしながら、ラオス人教員の養成とともに、彼らの日本語能力及び日本語教授能力の向上は最大の課題である(平田 2008)。

次に、(2)教材に関しては、2001 年より LJC が中心となって、『みんなの日本語』翻訳文法解説書のラオス語訳に着手し、著作権者である(株)スリーエーネットワークより、ラオスにおける出版および頒布の許可を得た。2004 年から、『みんなの日本語』本冊、翻訳文法解説書、CD をいずれもラオス国内に限定し、現地価格にて出版・販売している。ラオスで学ぶほとんどの学習者は、これらのテキストを使用している。しかし、『みんなの日本語』は、国内の学習者を対象にしており、場面も日本である。地名をはじめ、電車や新幹線、デパート、ATM などラオス人の生活にとってなじみの薄い語彙も多く、教える際に工夫が必要である。また、LJC では、ひらがな入門教材の『はじめましょう！にほんご』を出版・販売している。

しかしながら、ラオス語による説明がなされた教材は、これら 2 種類のみであり、一般ラオス人が入手可能な日本語教材は、他にない。ラオス国内において日本語の書籍を扱う書店はなく、日ラ辞書もない。タイ語が理解できるラオス人にとっては、タイで出版されたタイ語翻訳の書籍や問題集、日タイ辞書などは有用であるが、それらも国内での入手は困難な上、ラオス人学習者にとっては高価なものである。LJC の図書館と自習室に、一部所蔵されているのみである。また、後述する LJC 初中級クラスでは、ラオスの文脈や受講生の興味関心に沿って教師が作成したオリジナル教材を使用している他、カタカナ入門教材や初級漢字教材の作成にも着手しており、試行段階である。

最後に、(3)として『みんなの日本語』を中心とする初級修了後の日本語学習も、大きな課題である。

JLPT3 級受験者数を見てもわかるように、初級の指導に関しては、学校数も増え、徐々に充実してきている。だが、LJC に限らず、一般向けの中級および上級日本語講座を開講している機関はない。希望にあったクラスがないために学習を断念している初級または初中級修了者、初級の勉強は終わっても実際に話す・使う場がないために話せない・使えない学習者、JLPT2 級では目標が遠すぎるため目標を失いかけている学習者が多数いると思われる。また、初級修了以降の教材の欠如、中級を教えられるラオス人教員の不足、学習者の確保など様々な問題を抱えている。

報告者は、LJC での活動の中で、特に、初級修了以降の学習者に対しての実践に力を注いだ。上記のような課題を解決していくためには、まずは、ラオス人学習者の日本語力を高めることが必要である。つまり、課題(3)が急務であり、初級修了後のクラスが充実することによって、(1)教員養成や(2)教材開発にも取り組んでいくことができると考えたからである。

そこで、次に LJC の概要ならびに初中級クラスでの実践例を紹介し、ラオスの日本語教育の現状を報告する。

#### 4. 初級修了以降の学習者に対する実践例

##### 4.1 LJC 日本語コースの概要

ラオス日本人材開発センター(LJC)は、人材育成と日ラ両国の人的交流・相互理解の拠点となるべく、独立行政法人・国際協力機構(JICA)の協力を受け、2001 年 5 月に開所し、現在に至る。ラオス国立大学の付属機関であり、ビエンチャン市街から車でおよそ 30 分の郊外にある、ドンドークキャンパス内に位置する。日本語コース、ビジネスコース、相互理解促進事業、コンピュータコースを LJC 事業の柱とする。

日本語コースは、2001 年の開所以降、日本語を学んだ受講生は延べ 4000 名を超え、『みんなの日本語Ⅱ』までの学習を終え、所定の成績を修めた 221 名が初級を修了している(平田 2008)。大学生に限らず、一般ラオス人に広く学習の機会を提供しており、受講生の内訳は、約 70%がラオス国立大学の学生で、他には、公務員、会社員、僧侶などがある。

2008 年 8 月現在、標準コースは、入門 1 レベル、初級 6 レベル、初中級 3 レベルから構成される。各

クラスは 1 年 2 学期制、1 学期は計 75 時間(90 分×週 3 回×18 週間)で行われている。1 クラスは 24 名を定員とし、半年に 1 回、入学・編入試験を行っている。授業料は、2008 年 9 月現在、1 学期 38 万キープ<sup>8</sup>(テキストや教材費は別途)である。標準コース以外に、日本語教師入門クラス、日本語で日本料理を学ぶクラス、日本語能力試験対策クラス、企業・団体の委託によるクラスなどを随時開講している。

入門レベル(1 回 2 時間×12 回、計 24 時間)は、LJC が作成したひらがな入門教材である『はじめましょう！にほんご』を使って、ひらがなの読み書き、日本語の基本的な発音、数字や簡単な挨拶を学ぶ。

続く、初級レベルは、6 学期間(3 年間、約 480 時間)で『みんなの日本語Ⅰ』と『みんなの日本語Ⅱ』が終わるペースである。カタカナと漢字の導入・指導も各レベルにおいて行っている。そして、初級修了時に、JLPT3 級合格相当を目標とする。初中級レベルについては、4.2 以降で詳しく述べる。

授業時間は、原則として、月～金曜日の 17:00～18:30 および、18:45～20:15 であり、受講生は、大学等での専門の勉強や仕事を終えた後、LJC で日本語を勉強している。授業は、1 クラスを 2 名の講師が担当している(1 名が週 2 コマ、もう 1 名が週 1 コマ)。教育スタッフは、2008 年 8 月現在、LJC 所属のラオス国立大学教員 2 名(1 名は日本留学中)、LJC 雇用のラオス人教員 2 名、日本人常勤教員 2 名、日本語教育専門家 1 名、指導助手 1 名(報告者)の計 8 名である。その他、日本語室には、ラオス人事務スタッフ 2 名(教員志望)が常勤している。

その他、LJC 受講生が利用可能な自習室を月～金曜日の 15:00～18:30 まで開室している。テレビや CD ラジカセ、DVD の機材を完備し、教員が交代で 1 名在室する。ラオス国内では手に入らない日本語の書籍や辞書、音楽 CD など備え付けている。今後は、LJC 受講生だけでなく LJC 外で勉強している日本語学習者にも開放することを検討中である。

##### 4.2 初中級クラスの概要

現在、LJC で開講されている初級修了後のクラスは、2006 年 1 月より開設された。LJC では中級クラスと呼ばれているが、実際の日本語レベルは、初中級にあたり、中級で勉強を続けるための橋渡しのクラスとして位置づけられる。筆記試験とインタビューによる入学試験の結果、JLPT3 級合格程度の日本語レベルがあると判断された者が、受講できる。

InA・InB・InC と名づけた 3 学期間(計 1 年半、約 240 時間)の学習をすべて履修し、所定の成績を満たすことにより、コース修了となる。学期ごとに、中間と期末の 2 回、筆記試験と口頭試験を行っている。クラスの難易度は、InA から InB へ、InB から InC となり、易しいものから順に履修する。

受講生は、各クラス 5～10 名程度で、LJC の初級コースを修了し、本コースで学習を継続している者や、他機関で初級の勉強を終えた者、日本留学から帰国した者など様々である。特徴は、卒業が近づいた大学 4・5 年生や社会人が多い。学習動機は、「将来、日本へ留学したい」「就職の役に立つかもしれない」「観光ガイドをしてみたい」という漠然としたもので、ラオスの日本語学習者全てに言えることであるが、具体的で強い動機を持つ者は少ない。

授業は 2008 年 8 月現在、日本人教員 2 名(うち 1 名は報告者)が担当している。講師間の連絡は、授業ごとの連絡ノート、口頭、E メールによってなされているほか、日本語コースの全教育スタッフが参加する初中級講師会が、隔週で行われている。

コースの目標は、(1)初級での既習文法・文型・語彙を『使える』ようにすること、(2)技能を駆使して情報や考えや気持ちを『伝えられる』ようにすること、(3)自律学習能力の促進を図ることである。このうち、特に重視しているのが(2)である。(1)の『使える』ようになることは、知識の蓄積にとどまらず、アウトプットができる、すなわち誰かに『伝えられる』ようになることを意味する。さらに、日本語で『伝える』ことにより、受講生が日本語を介して、ラオス社会や日本社会と『つながる』こと、受講生とラオス社会あるいは日本社会が、互いに影響や刺激を受けて『変わる』ことを期待する。

LJC では、年に数回、スタディーツアー等で日本の大学生が来所した際に、交流会が設定され、ラオスや自分のことについて紹介したり、意見交換をしたりする場が用意されている。クラス設計にあたって、この機会を日本語学習の成果発表の重要な場として位置づけ、授業と結びつけることを考えた。現在では、対面での交流会に限らず、多様な交流相手・方法を求め、様々な活動を取り入れている。

そして、現状では、LJC のみならずラオス国内において、本コース修了後に学習を継続できる一般日本語クラスが開講されていないため、受講生が教室を離れた後のことも見据えると、(3) 自律学習能力

の促進を図ることも切実な目標である。そこで、(3)に必要な技術力を高めるために、表 2 のその他の項目にあるように、辞書や E メール、漢字などの指導も行っている。

以上のような考え方に立ち、具体的には、『ジェイ・ブリッジ』(小山 2002)を参考教材として、ラオスの文脈や学習者の既習項目に合わせたオリジナル教材を作成し、授業を行っている。2007 年度および 2008 年度に扱った内容と各課の学習活動の流れは、表 1・2 と秋山・田淵(2008a,2008b)を参照されたい。教室内外をつなぐ活動の実践については、秋山・田淵(2008b)で述べた。

### 4.3 伝える・つながる・変わる』を目指した実践

#### 4.3.1 実践例「子どものころの思い出」

本稿では、2007 年 9 月～2008 年 2 月に開講した初中級クラスの最初の段階である、InA クラスの L1-2 の「子どものころの思い出」を例に、実践を紹介する。受講生は 5 名であった。タスクや成果発表はトピックによって異なるが、クラス活動の流れは、表 2 の①～⑧までの一連のステップを繰り返す行うように設計されている。

授業は、表 2 に従って、まず、①子どものころどんな所に住んでいたか、どんな一日を過ごしていたかなどについてクラス全員で話し、ブレインストーミングする。次に、②受講生が子どものころについて『伝える』時に、必要となりそうな語彙を導入・練習した後、③子どものころの思い出について、一人ずつスピーチ形式で発表する。原稿やメモを書いてもよく、発表の様子をビデオに撮影する。そして、④トピックに関連した聴解・読解をしたあとで、⑤撮影したビデオをクラスで見る。ビデオを見ながら、発表者自身に話した内容や文法、話し方について確認し、『伝えたい』ことに適切な表現や文法が使えていたかどうかや『伝え方』はいいかどうか、わかりにくい箇所がないか気づきを促す。その後、受講生同士や教師もコメントする。⑥そのトピックを話す際に、必要となる文法項目の復習や導入・練習を行った後、⑦で確認問題を行う。そして、⑧で③を自己修正する。⑧は担当教師に提出し、教師は添削やフィードバックを行う。この①～⑧と平行して、⑨のタスクや本コースの学習活動のまとめである⑩成果発表も設定されている。⑩成果発表は、受講生にとって、具体的かつ短期的な目標となるもので、教室外とも連携を図り、受講生とラオス・日本

社会が『つながる』きっかけとなるものを設定している。こうした場合は、日本語環境の乏しいラオスにおいて、また、JLPT3 級合格後、日本語学習の短期的目標を見失いつつある受講生にとって、有益であると考ええる。「子どものころの思い出」の⑩成果発表では、日本人学生との作文交換活動を設定した。

#### 4.3.2 具体的かつ短期的な目標としての成果発表

日本人学生との作文交換活動は、さくぶん.org<sup>9</sup>の変則的な活動と言える。さくぶん.org は、電子掲示板に載せたエッセーに感想をつけ合い、文章による交流を目的としたものであるが、ラオスにおいて、インターネットを利用した活動は、受講生の負担がとて大きい。日本語環境のあるパソコンを利用できる場所も限られる上、インターネットカフェを利用すると金銭的な負担もある。また、日本語タイピングの問題だけではなく、受講生は E メールアドレスの取得もしなければならず、パソコンに触ること自体が初めてな受講生もあり、パソコンを使ったことはあっても E メールを使ったやりとりは不慣れである。これらは、初中級クラスの進め方に慣れた InA クラスの後半以降で指導する事柄であるため、ここで行うことは困難であると考えた。そこで、郵送による交換活動を行うことにした。郵送には、EMS を利用したので、3~5 日で到着した。

日本人学生は、都内の某大学の文章表現系の授業で希望者を募り、ラオス側受講生と 1 対 1 のペアになるようにした。日本語教育を専攻している学生ではなく、1 名を除いてほとんど留学生がいない大学に所属しており、海外渡航経験も友人として外国人と交流した経験もなかった。担当教員から、ラオス側の教員が読解を補助するので、学習者のために内容や言語を調整して書く必要はないと告げられていた。そのため、InA の受講生の日本語レベルを超えた漢字や語彙・表現も多かった。ペアは、ラオス側の担当教師(報告者)が決めた。また、LJC では横書きの原稿用紙を使用し、手書きで書いている。受講生の負担を軽減するため、日本側も横書きの原稿用紙を用い、手書きで書いてもらうよう依頼した。

テーマは「子どものころの思い出」で、一番印象に残っていることについて、ラオス側は表 2 の⑧で自己修正した後、教師の添削・フィードバックを受けたものをもう一度、見直し、清書してから送付した。双方がエッセーを交換し、読んだ後、感想を書いた。ラオス側は、担当教師が事前に未習漢字に

のみふり仮名をふったものを配布した。また、エッセーを読んで、感想を書くために授業時間を 2 回分割り当てた。辞書等を使用し、教員に自由に質問できるようにし、かつ教員は巡回して内容を確認した。終わらない分は、宿題にした。それから、再び郵送で感想を交換し、お互いの感想を読んだ。最後に、ラオス側からは、顔写真付の寄せ書きを作成し、お礼として郵送した。

この間、日本・ラオス側の担当教師は、進捗状況や問題になっている点、郵便の発送・到着状況などを E メールでこまめに報告しあった。

#### 4.3.3 作文交換活動後のアンケート結果

作文交換活動後に、ラオス側の受講生に行ったアンケート結果によると、読む能力については、5 名中 1 名がとて高くなった、残り 4 名が高くなったと答え、書く能力に関しては、5 名全員が高くなったと自己評価した。初級クラスまでは、教師やクラスメイトと、教室内での日本語使用しかない場合が多い。しかし、今回、教室外で、それも日本にいる同世代の日本人と『つながる』経験を得た。日本人学生に感想をもらったことで、自分の書いたものが『伝わった』と実感したこと、日本人学生の書いた日本語に触れられたことや完璧ではなくとも「わかった」ということが、少なからず自信になった様子がわかる。

そして、この活動は「新しい言葉や考え方を得たのでとてよかった」「勉強したことについて覚えやすくなったのでとてよかった」と答えている。教室内での学習と教室外での活動が連携していたことにより、両者に『つながり』ができた。教室内で学んだことを実際に使う場がある緊張感と高揚感を得られたと同時に、教室外の学習があることで、教室内での学習の意味をあらためて見出せたのではないかと考える。

感想を交換したことについては、「書いた作文が日本へ行ったのがよかった」「日本人に日本語で作文を書くのは初めてだったから、嬉しい」といった『つながる』喜びに関する感想が聞かれた。これは、日本から届いたものを配布した時に見せた受講生の顔からも、うかがい知ることができる。そして、この喜びは、「もう一度したい」「このような活動がもっとほしい」「この活動がよくなるためには、手紙とインターネットで会話したり意見を交換したりしたほうがいい」など、次の『つながり』を求める気

持ちの芽生えへとつながっていた。

内容面での『つながり』も感じる事ができていた。例えば、日本人学生の一人は、子どもの頃に住んでいた家の近くに流れていた「川」をテーマに作文を書いた。それを読んだラオス人受講生は、日本にも川があるが、その描写から、ラオスに流れるメコン川とは違い、人々の生活そのものには密着していないことを指摘した。ラオス人受講生の子どもの頃の思い出にも、よく川が出てくるが、彼らにとっての川は素手や網で魚を獲ったり、泳いだり、洗濯や水浴びをしたりする場所である。この受講生は、このような違いに気づけたことを「面白かった」と評価した。

しかしながら、日本人学生の作文は、学習者のために内容や言語を調整して書かれたものでなかったために、中にはラオス人受講生の日本語レベルに対して、受講生一人の力では、読解が困難な文章もあった。内容の深い理解ができないと感想を書くことはさらに困難となる。今回は担当教師が補足や説明を行ったが、この点は今度の課題である。

ラオス人受講生は、いつもより丁寧に清書した。授業中、難しいと言いながら辞書を広げてエッセーを読む真剣な目、教室がシーンと静まり返って感想を読む様子を何度も見た。初中級クラスの開講直後は、教科書に沿って文法を積み上げていき、ラオス語による語彙や文法翻訳書もある初級までの学習形態との違いに、戸惑う受講生は少なくない。活動型の学習スタイルに不慣れな受講生も多い。しかし、ラオスや自分のことを相手に『伝える』ために日本語を使うことが、喜びや楽しみに変わっている。初中級クラスでは、こうした受講生の『変わる』を目標としている。

一方、日本人学生にもエッセーを書くだけでは得られない学びが見られた。日本側担当教師からのメールの一部を紹介する。

ちょうど研究室の3年生が来たので、ざっと見せました。封筒の、アルファベットでもなく漢字でもない文字(なんというのですか?)を見て、封筒を手に取りながら感激していました。学生さんの字が綺麗なのも、しきりに関心していまいした。(2007年11月14日)

日本語学習者との交流経験がほとんどない日本人学生にとって、作文交換だけではなく、日本語学習者が書く日本語の文章や文字、ラオス文字に触れることもできた。これらは、よりラオスとの『つな

がり』を実感するきっかけになったと期待する。

#### 4.3.4 LJC 初中級クラスの今後の課題

LJC 初中級クラスは、立ち上げ段階だった報告者の着任当初から試行錯誤を繰り返す中で、充実期を迎えている。教室外の『つながる』相手も増え、定期的に活動ができる相手も見つかった。現在は、教材の整備、新たな活動相手・方法の展開に入っている。特に、初中級レベルの教材の整備は、ラオスにおける日本語教育の課題として挙げた(2)教材開発の一助となるだろう。

報告者は、この初中級クラスの運営に関わる中で、特に、日本語教師自身が『つながる』ツールとして「受講生の多様なリソースとなる」ことの大切さを学んだ。例えば、ラオスや自分のことを話す際には、聞き手を意識させるようにしている。「ラオスへ旅行する人にアドバイスする」のトピックでは、スタディーツアーに来る日本人学生に対してのアドバイスを設定しているが、日本人学生に接したことがないと何をアドバイスしたらいいか、想像しにくい。ラオスでは1年中いる蚊が、日本には夏の暑い時期しかいない、お寺に入る時に気をつけることを言わなければならない、といった具体的な例は、なかなか出てこない。この時に、まず教師は受講生にとって、身近でイメージしやすい聞き手の日本人となる。そこで、クラスでは、紹介のための事前活動として、担当教師と一緒に観光地へ行く課外活動を設けた。語彙の導入だけでなく、紹介方法やアドバイスのポイントも一緒に考えることができた。

そして、教師は、自分の持っているリソースを活かして、「受講生にリソースを与える」ことも必要である。本稿で紹介した日本人学生との作文交換活動は、報告者がさくぶん.orgのメンバーであることから実現したと言える。また、つながる相手との円滑かつ継続的なやりとりのためには、報告者と日本側の担当教師がEメールで状況報告をしあったように、教師間の連携も忘れてはならない。今後の課題としては、内容面での『つながり』を深化させていくことが挙げられる。そのためには、つながる相手・方法・トピックの改善も考えていきたい。さらに、『つながる』から一步踏み込んで、双方の『変わる』過程を丹念に追うことも大切である。

受講生に関しては、大学4・5年生、社会人が多く、論文を書いたり、勉強や仕事が忙しくなったり、卒業後、田舎へ帰る者もいる。強い動機が保たれな

いと、学習を続けるのが困難になってくる。その結果、宿題や課題についていけなくなり、学期の途中でやめてしまう受講生も数名いる。

同時に、2007年度よりラオスでも JLPT が行われるようになり、これまで漠然と勉強を続けていた初級修了者にとって、JLPT2 級合格を目標に見据える者も出始めた。しかし、LJC 初中級クラスも、初級の既習文型・語彙の運用を目標としたクラスであることを考えると、その道のりは遠い。その上、前述のように、LJC のみならずラオス国内においても、学習を継続できるような一般日本語クラスは開講されていない。受講生は、入手可能な教材も非常に限られている中で、自分で勉強し続けるしかない。

このような状況下で、今後は益々、日本語力の伸長が実感できて、日本語学習を継続していける強い動機を保持できるような環境作りが必要である。中級カリキュラムの開発が急務であるとともに、受講生自身が、自分の周りのリソースを活用し、自律的に学習したり、情報をとったり、伝えたりできる力を養成することも大切である。LJC 初中級クラス修了生を含む一般の日本語学習者に対しても、LJC 自習室を開放することは、ラオスの日本語教育を牽引していく役割を担う LJC が、果たせる大きな仕事であろう。

教員に関しては、先にも述べたように、今は、日本人教員が初中級クラスを担当している。『みんなの日本語』以降もラオス人教員が教鞭をとれるようになることは、大きな課題である。このことは、先にラオスにおける日本語教育の課題として述べた(1)教員養成にも言えることである。現在、初中級クラスを LJC のラオス人教員 1 名が受講している。もう 1 名の教員も初中級クラス修了生である。彼女たちは、今は初級の初歩段階しか教えていないが、近い将来、ラオスの日本語教育の中核として活躍するようになるだろう。その時に、この初中級クラスを受講していたことは、彼女たちの日本語力の向上だけでなく、実際に教える時やクラス運営、カリキュラム作成の際にも役に立つ日が来ると信じている。こうしたラオス人教師の育成のためにも、ラオスにおける初中級クラスの充実、中級へのスムーズな移行は、今後も引き続き、最大の課題であると考ええる。

## 5. まとめ

ラオスの日本語教育は、2001 年に LJC において

組織的な学習が開始してから、わずか 7 年である。この間、初級レベルの学習環境の充実と初級修了者の増加、2007 年度よりラオス国内においても JLPT が実施されるようになり、2008 年からはラオス国立大学文学部日本語学科の卒業生の輩出が始まった。ラオスの日本語教育は、今、「創成期」から「発展期」に移行している(平田 2008)。

このようなラオスの日本語教育における今後の課題としては、3.2.3 でも述べたように、(1)ラオス人教員の不足、(2)ラオスの学習者や文脈にあった教材の不足、(3)初級から中級への橋渡しならびに中級以降のカリキュラムの整備が挙げられる。本稿では、特に、(3)の初級から中級への橋渡し段階について、受講生が日本語を使って、ラオスや自分のことを『伝え』、伝える相手と『つながり』、その結果、影響を受けた双方が『変わる』ことを目標とした実践を報告した。

短期的かつ具体的な目標を掲げた活動型初中級クラスは、教室以外での日本語環境に乏しい海外において、学習者が日本語を使って何かを『伝えられる』ようになるために、有効であると考ええる。そして、教室内の閉じた環境から抜け出し、学習者がラオス社会や日本社会と『つながり』を持ちながら学習することは、ラオスの人材育成の一助となる。

初級修了者が、こうした力を蓄えた上で、今後は、JLPT2 級合格や日本語を使って働く機会を得ることも目標に据えた中級以降の学習の場の展開が望まれている。近隣国のように、観光業やビジネス場面での日本語の需要が高まることを予想すると、早急な課題であると言える。今後のラオスの日本語教育が、発展することを期待してやまない。

## 注

1. ジャパンファンデーション・ボランティア制度(略称 JF ボランティア)は、2004 年に創設された。目的は、日本と諸外国との国際文化交流を国民レベルで促進することである。事業の一つとして、海外の教育機関において、国際交流基金派遣日本語教育専門家等の指導・支援を受けながら、日本語を教える海外日本語教育指導助手のプログラムを設け、2005 年度より指導助手の派遣が始まった。
2. 2006 年度に派遣された第 2 期指導助手の任期は原則として 2 年で、ベトナム(ハノイ・ホーチミン)、カンボジア、ラオス、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス、フランス、ポーランド、シリアの 9 カ国 11 機関に、計 11 名が派遣された。詳細は、国際交流基金ホームペ



ージ「ジャパンファンデーション ボランティア制度」を参照。(http://www.jpf.go.jp/j/about/adoption/volunteer/)

3. JICA ホームページ「ようこそ日本センター」  
(http://japancenter.jica.go.jp/laos.html)ならびに、LJC ホームページを参照。(http://www.ljcenter.org/jp/)
4. 外務省ホームページ  
(http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html)  
ならびに、在ラオス日本国大使館ホームページを参照。  
(http://www.la.emb-japan.go.jp/index\_j.htm)
5. 国際交流基金ホームページ「世界の日本語教育の現場から」を参照。  
(http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan\_asia/laos/2008/report02.html)
6. 国際交流基金ホームページ「世界の日本語教育の現場から」を参照。  
(http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan\_asia/laos/2008/report01.html)
7. 2008 年 8 月をもって、ラオスへの派遣は中止となる。
8. 為替レートは、1 ドル＝約 8700 キープ(2008 年 6 月現在)。
9. さくぶん.org(代表得丸智子氏)というインターネット上の電子掲示板(http://www.sakubun.org)に、日本人学生と日本語学習者が日本語でエッセイ(作文)を投稿し、交流を図る活動である。

※脚注に記載したホームページは、全て 2008 年 9 月 1 日アクセス。

## 参考文献

- 秋山佳世・田渕七海子(2008a)「ラオスにおける活動型中級コースの設計と実践」『国際交流基金バンコク日本文化センター紀要』第 5 号
- 秋山佳世・田渕七海子(2008b)「ラオスにおける活動型中級コースの評価と改善」タイ国日本語教育研究会第 20 回年次セミナー分科会 <http://www.geocities.jp/thai\_nihongo/pastdata/mcet2007.html>
- 上野暁美(2008)「ラオス教育セクターの現状と課題—2015 年までの初等教育完全普及を目指して—」鈴木基義編『ラオスの社会・経済基盤』JICA ラオス事務所, 137-178.
- 国際交流基金(2008)『海外の日本語教育の現状 - 日本語教育機関調査・2006 年』凡人社
- 国際交流基金「日本語教育国別情報：2006 年度ラオス」  
<http://www.jpf.go.jp/j/Japanese/survey/country/2006/laos.html>
- 小山悟(2002)『J.Bridge ジェイ・ブリッジ』凡人社
- 平田好(2007)「ラオスにおける日本語教師養成・現職教師研修の試み」『国際交流基金バンコク日本文化センター紀要』第 4 号, 223-231.
- 平田好(2008)「ラオスにおける日本語教育の現状と課題—近隣諸国との比較から—」鈴木基義編『ラオスの社会・経済基盤』JICA ラオス事務所, 227-254.

たぶち なみこ／ラオス国立大学ラオス日本人材開発センター

namiko.t@hyper.ocn.ne.jp

## 稿末資料

表 1 各クラスで扱うトピックと教室内外をつなぐ活動の実施例

クラス	テーマ	トピック	教室内外をつなぐ活動の実施例
InA (2007 年 9 月～ 2008 年 2 月)	L.1 紹介	L1-1：自己紹介・友人紹介 L1-2：子どもの頃の思い出 L1-3：性格	●日本人学生との作文交換
	L.2 旅行	L2-1：ラオスに旅行する人へのアドバイス L2-2：ラオス紹介 L2-3：ラオスの観光地紹介	●TV 会議システムを使った日本人学生との交流セッション ●LJC 訪問日本人学生との交流会で発表 ●他クラスとの合同作文発表会
InB (2008 年 2～7 月)	L.1 料理	L1-1：ラオス料理の作り方	●在住日本人と一緒にラオス料理を作る
	L.2 異文化理解	L2-1：外国での生活 L2-2：国民性 L2-3：ラオスと日本の習慣・マナー	●日本人との E メール活動 ●にほんごまつりでクイズ発表 ●LJC ロビーに掲示
	L.3 私たちの未来	L3-1：あったらいいなあ L3-2：20 年後のラオスと私	●他クラスとの合同作文発表会

InC (2008 年 9 月 ~ 2009 年 2 月 予定)	L.1 理想の パートナー	L1-1: 結婚観 L1-2: ひとこと言ってあげる L1-3: 国際結婚	●日本人大学生との作文交換 ●隣国の日本語学習者との意見交換 ●在住日本人とのビジターセッション
	L.2 教育	L2-1: ラオスと日本の大学 (教育制度) L2-2: 親の立場・子の立場 L2-3: ラオスの教育問題	●LJC 訪問日本人学生との交流会で発表

表 2 各課の学習活動の流れ

学習活動の流れ	学習活動のねらい
①導入	話題提供 (→『伝える』内容の意識化)
②語彙	ラオスの学習者が『伝える』際に必要かつ使用可能性の高い語彙を復習・導入
③発話	既習・新出の語彙や文法を使った発話 (→『伝える (練習)』) + ビデオ撮影
④聴解・読解	聴解/読解力を高めると同時に、『伝え方』の例として位置づけ
⑤意識化	a. ④を例に、自分の日本語力への気づき・自己評価 b. ③のビデオを見て、気づき・相互評価 + 講師によるフィードバック
⑥文法	学習者が『伝える』際に必要な文法事項を復習・導入
⑦空所補充問題	⑥の文法事項の確認 (宿題)
⑧ ③の修正	④⑤⑥を踏まえ、③の内容を自己修正 (宿題) + 講師による添削・フィードバック
⑨タスク	a. 学習者の考えや気持ち意識化されるようなタスク b. 日本について知ると同時に、自分や自国についても再考できるタスク (a. b. →『伝える』・『つながる』準備) c. 自律学習のヒントを提示
⑩成果発表	これまでの学習成果をまとめて発表する/試験 (学習内容をアウトプットし、『つながる』場=短期目標)
その他	a. 活動や発表、課題に必要な技能面の指導 (→『伝える』・『つながる』準備) 中級クラスでの勉強の仕方、辞書の引き方 (辞書貸し出し) Eメール (Yahoo! JAPAN の ID 取得、日本語タイピング、マナー)、情報収集の方法 わかりやすい話し方、プレゼンテーションの仕方、原稿用紙の使い方 b. 漢字指導 c. 授業では扱わない文法事項の復習 (宿題)

## A report of Japanese-language education in Lao P.D.R — focused on the writing composition activity NNS in Laos and NS in Japan —

TABUCHI Namiko

### Abstract

In this article is to report the history and current status of Japanese-language education in Lao P.D.R and Lao-Japan Human Resource Cooperation Center, National University of Laos (LJC). The present problems in Laos: (1) shortage of teachers in Lao people, (2) shortage of teaching materials, and (3) intermediate class. Then, this paper is to introduce on the pre-intermediate class in LJC, we tried the writing composition activity NNS in Laos and NS in Japan.

【Keywords】 pre-intermediate class, autonomous learning, writing composition activity

(Lao-Japan Human Resource Cooperation Center, National University of Laos)